

餌付け集団では、給餌場面での反発的相互作用を観察し、優劣順位の確定を試みた。現在、優劣順位と反発的相互作用の関連について検討している。また、給餌場面における空間的近接の記録から、未成体の個体関係が優劣順位とどのように関わっているかを分析した。その結果、給餌場面における伴食について、中・低順位の新生体の中には、すでに3~4か月齢で母親から離れ、成体雄と近接しているものがみられた。高順位の新生体も5~6か月齢で母親から離れるようになるが、中・低順位の新生体が母親とは全く別のエリアで採食するのに対して、高順位の新生体は母親の位置するエリア内にいることが多かった。このように未成体は発達初期から母親に依存した優劣関係の中で社会的交渉を持っていることが明らかになった。同じ餌付け集団でいくつかの年齢層の成体雄の個体関係を比較した結果、「周辺化」の過程にある準成体雄は集団の中で社会的位置が最も周辺部にある時期であることが明らかになった。準成体雄の周辺部での個体関係は、集団成員との個体関係の形成・維持に重要であることが考察された。

放飼集団では、3頭以上の関わる争いについての分析を行った。その結果、優劣順位と loser support の量との間に順位相関がみられなかったこと、 α -male から低順位雌への loser support が比較的多くみられたことから、この集団は順位秩序の厳しくない集団であると思われる。

自然集団の観察では、12月に調査地域内の大津地区で57頭、定藤地区で17頭の集団の個体数が数えられた。その中で、大津地区では成体雄・雌から成る40頭前後の群れに15頭前後の雄集団が追従していることが明らかになった。

高崎山生息ニホンザルの優劣順位に伴う採食量の研究

横田直人・長岡壽和（大分短大・園芸）

高崎山に生息するニホンザルの採食生態について、前年度は経産メスを対象に、最優位と最劣位の間でエサ摂取<自然エサ（B群）と人工エサ（A・B群）を区別して>に量的および質的にどのような違いがあるかどうかを調べてきた。

本年度はB群を対象に同様の調査を実施したが、優劣の順位間差はやや狭め、中位を除いた優位と

劣位の2つの地位内の個体についておこなった。さらに調査時期が出産シーズン後半以降にさしかかるため、各地位内を出産個体と出産に至らなかった個体とに区別して観察個体（各3~4頭、計13頭）を選んだ。ここでは、1988年7~8月に5日~7日単位で連続追跡法によりおこなった優劣間の人工エサ摂取の状況について、優位個体・優位出産個体・劣位個体・劣位出産個体を順に対比して、量的な面を報告するとともに質的な面を検討する。

コムギの日平均摂取エネルギーは、310.0 : 263.9 : 127.9 : 142.4kcalで、コムギの総摂取時間は、30.6 : 28.2 : 12.7 : 14.0分であった。コムギの摂取エネルギーと摂取時間も優劣間に有意な差を認められたものの、出産の有無による有意差は認められなかった。サツマイモの日平均摂取エネルギーは、276.0 : 359.8 : 268.6 : 331.0kcalで、優劣間および出産の有無による有意差は認められなかったが、優・劣位個体とも出産個体の摂取エネルギーは、出産に至らなかった優・劣位個体を上まわった。落花生ほか売店から得るエサの日平均摂取エネルギーは、30.2 : 103.2 : 4.5 : 24.1kcalで、優劣間にのみ有意な差を認めた。これらのエサを総合した日平均総摂取エネルギーは、615.2 : 726.8 : 400.9 : 497.6kcalで、優劣間でともに出産個体が出産に至らなかった個体よりほぼ同量（約90kcal）多くエサを摂取していた。

人工エサ獲得の面での社会的順位性は、コムギの摂取量・摂取時間にその影響がみられた。出産個体はエサ獲得に積極的であることもうかがえた。

課題 3

屋久島上部域のニホンザルの生態学的研究

好廣真一（龍谷大・経営）

黒木一男（泰西高）

増井憲一（龍谷大）

屋久島上部域のニホンザルを、1988年8月、9月、1989年3月に調査した。

瀬切川上流域では、標高850-1100mの間に平瀬群と天上群を確認し、後者の個体数・構成について、良い資料を新たに得た（黒木による、1988年8月15日）。すなわち、オトナメス：8、4-5